



Number. THREE
2003. 秋

学環学府
東京大学
大学院情報学環
学際情報学府

、プラトンやアリストテ
としてあります。我々が記号論という言葉によ
ぶときには、2つの節があって、17世紀、古典
主義、バロックの時代の近世記号論と、19世
紀末から20世紀にかけての現代記号論があり
ます。近世記号論は、イギリス人の哲学者ライブニツ
ン・ロックや、ドイツ人の哲学者ライブニツ
ンなどが始めた学問の系譜で、人間の言葉を改良
してあらゆることを表現できる、その組み合わせ
によってあらゆるアイデアを操作することが
できるような記号のシステムをつくらうという、
計算機をつくる発想の淵源なんです。実際、パ
スカルは計算機をつくっていますしね、そういう
記号論です。

現代記号論は、19世紀に電信、電話、写真
などが発明され、それから一世紀経ち、さまざ
まなメディアが共存する中で人々が生活するよ
うになり、言葉だけではなく、イメージ、絵、
写真など、様々なメディアによって成立する、
そういう表現の手段を統合したのが、現代記号論
の始まりだと考えられます。つまり、言葉
以外の言語学だし、文字の研究なら文字を
扱う文学、絵画だったら美術や美学というよう
に分かれていたけど、人間の生活は、個々に分
かれて成り立っているだけではなく、言葉を聞
きながら見ているわけですよ、言葉を聞
くマツトで考えなきゃいけないように
なるんですね。非常に大筋でいって、我々の生
活をどのように統一に理解するか、統一フォ
ーマットでどのように理解しようか、という時
に求められる知のありかたなんです。

記号論は、人間の活動の中での意味という問
題に注目すること、学問の体系を作り出して
きました。一言、意味の問題を計算を作り出して
考えてきたのが情報学なんです。例えば、詩
をコンピュータで作るとか、それは意味の問題
をもの凄く計算でアプローチしているんです。
そういう中で、意味というものをよく知ってい
る学問と提携すると、どの問題が扱えて、どの
問題が扱えないとかね、どういうことをやると
意味の問題がもっと接近することができるか、
ということがわかってくるはずなんです。僕
にとっては、情報技術の問題を、意味の問題に
どう書き換えるのかっていう立場ではあるんだ
けど、同時に、情報プロパーの人からみれば、
記号論がやってきたような意味の問題を上手く
扱わせて、情報で解けなかった問題、課題
がある方向が見えてきて、お互いのコラボ
レーションが可能になるはずなんです。記号
論のインターフェースをつくらうという
記号論、記号論の方から情報に寄っ
て情報記号論とよんでるわけです。
「パリに留学したのが1970年代半
ばり」「知のトレンド」、もっ
たんです。歴史に名前
、記号学者のロラン・バル
イーストローズ、哲学者の
有名な人たちがその辺
りの人たちの授業を直接受
ね、それは、今でも強
く影響を及ぼしている
話したことはないけ
れども、最近
あるんです。彼のように大きな仕事を
はやはり普通の人は違うんだけ
を驚くんだけど、

INTERVIEW

石田英敬教授インタビュー

「難解」というイメージの記号論。石田教授に「誰にでもわかるように」とお願いして話を聞いた。交流が深いフランスの話も、もっと紹介したいが、それはまた別の機会に……。



先生が研究されている情報記号論を、専門以外の人にもわかりやすく説明していただきたいのですが？

それは難しいですね(笑)。情報記号論を説明する前に、まず記号論ですが、これは哲学と重なる部分があって、プラトンやアリストテレスのころまで遡れる学問です。それがまずルーツとしてあります。我々が記号論という言葉でよぶときには、2つの節があって、17世紀、古典主義、バロックの時代の近世記号論と、19世紀末から20世

紀にかけての現代記号論があります。近世記号論は、イギリス人の哲学者ジョン・ロックや、ドイツ人の哲学者ライプニッツなどが始めた学問の系譜で、人間の言葉を改良してあらゆることを表現できる、その組み合わせによってあらゆるアイデアを操作することができるような記号のシステムをつくらうという、計算機をつくる発想の淵源なんです。実際、パスカルは計算機をつくっていますね、そういうコンピュータの思想的起源になるのが、近世記号論です。

現代記号論は、19世紀に電信、電話、写真などが発明され、それから一世紀経ち、さまざまなメディアが共存する中で人々が生活するようになり、言葉だけではなく、イメージ、絵、写真など、様々なメディアによって成立する、そういう表現の手段を統一したフォーマットで扱う学問が必要だと言われたのが、現代記号論の始まりだと考えられています。つまり、言葉の研究なら言語学だし、文字の研究なら文字を扱う文学、絵画だったら美術や美学というように分かれていたけど、人間の生活は、個々に分かれて成り立っているわけではなく、言葉を聞きながら映像を見ているわけですよ、だから統一のフォーマットで考えなきゃいけないようになるんですね。非常に大筋でいうと、我々の生活をどのように統一的理解するか、統一フォーマットでどのように理解しようか、という時に求められる知のありかたなんですね。

では、いよいよ本題の情報記号論というのは？

記号論は、人間の活動の中での意味という問題に注目することで、学問の体系を作り出してきました。一方、意味の問題を計算を基本にして考えてきたのが情報学なんです。例えば、詩をコンピュータで作るとか、それは意味の問題をもの凄いい計算でアプローチしているんです。そういう中で、意味というも

のをよく知っている学問と提携すると、どの問題が扱えて、どの問題が扱えないとかね、どういうことをやると意味の問題がもっと接近することができるか、ということがわかってくるはずなんです。僕にとっては、情報技術の問題を、意味の問題にどう書き換えるのかっていう立場ではあるんだけど、同時に、情報プロパーの人からみれば、記号論がやってきたような意味の問題を上手くリンクさせて、情報で解けなかった問題、課題を解決する方向が見えてきて、お互いのコラボレーションが可能になるはずなんです。記号論と情報学のインターフェースをつくらうというので、情報記号論、記号論の方から情報に寄っていくので、情報記号論とよんでるわけです。

フランスとは深い関わりがあるようですが、そもそも、なぜフランスだったのですか？

僕が最初にパリに留学したのが1970年代半ば、そのころはパリが「知のトレンド」、もっとも華やかな時期だったんですよ。歴史に名前が残るような人たちが、記号学者のロラン・バルト、人類学者のレヴィ=ストロース、哲学者のフーコーとかね、すごく有名な人たちがその辺にいた(笑)。僕はその人たちの授業を直接受けることができたんですね。それは、今でも強烈な、自分の人生を方向づけるものでした。

フーコーには直接会って話したことはないけれど、彼の本を翻訳をした関係もあって、最近では生前彼が住んでいた部屋で調べ物をするということもあるんですよ。彼のように大きな仕事をする人はやはり普通の人とは違うんですね、すごい本を書くんだけど、我々が知っている本は1冊でも、それを書くまでに10個くらいバージョンを作るんですよ、どんどん書き換えていく。おまけにフーコーみたいな人はね、後で捨てちゃうんだよね、焼いたりして。たまたま残った未刊の直筆草稿があって、読むことができたんですが、未刊だから、フーコーの次に読んだのは僕だった…。

研究を離れたところで、興味のあることは？

僕は、ストレスを解消するときには、京都の龍安寺や大徳寺などに行き、じっと座って庭を見るんです。座禅まではいかないけど(笑)。お茶や、庭というのはセラピーなんですよ、精神分析と同じでなんです。千利休は豊臣秀吉の、今で言うセラピストだった。戦国時代だからもの凄いいストレスがあるでしょう、それを精神的に解き放つための療法なんですね。世界の時間から切り取られた静止した時間、ヨーロッパの僧院でもそうなんですけど、世俗の時間から切り取られた聖なる時間、時間が停止した空間を作って、心を世界から解き放す。そういう「お庭」は、わりと好きなんです。



TOPICS



入場に長い列、 坂村健教授特別講演会

今春、紫綬褒章を受章した坂村健教授。受章を記念し、7月25日(金)安田講堂にて情報学環主催で、特別講演会が開かれた。熱い中、開場2時間前から入場を待つ人々が集まり、開場時には長い列ができた。来場者数、約700人。学生、会社員など、老若男女入場者の様子は様々。

坂村教授は、「ユビキタスコンピューティングの未来を目指して TRONプロジェクトの20年」をテーマに約1時間半、エネルギーに語り、集まった人々は、時にはメモをとりながら、熱心に聞いていた。講演最後には、坂村教授の秘書をしている大来紀子さんから大きな花束が贈られ、受章のお祝いに文字どおり花を添えた。

講演会后、関係者間で行われた懇親会では、集まった坂村教授ゆかりの人々から、懐かしい話、裏話を交えてお祝いの言葉が寄せられ、賑やかな会になった。



「異能のひとシリーズ」が スタート、学環講話会

第8回から学環講話会は、河口洋一郎教授が担当、「異能のひとシリーズ」として再スタートした。「異能のひと」とは、いったいどういう方々の世界に触れることになるのか？興味津々の人も多いかもしれない。

新シリーズ最初は、新領域創成科学研究科濱野保樹助教授が、「日本のゲーム・アニメ・映画を考える」をテーマにコンテンツ産業、日本のアニメ業界の現状などについて話した。日本のマンガなどの、ポップカルチャーに触発され、日本語学習をする人が海外で増えていること、「オタク文化」が海外に広まっているなどの現象についても紹介。また、アメリカのロイヤリティー制度について、実例を挙げて語った。講演後は、河口教授の質問に濱野助教授が応じ、対談形式で更に続き、尽きることのない話は、懇親会、二次会へと続いたようだ。

次回は、10月17日に、テレビコマーシャル映像ディレクター中島信也氏が、「楽しいテレビCM」をテーマに話し、河口教授との“掛合い”も予定している。



iii online プロジェクト

大学院の新しい学びの形を求めて

東京大学大学院情報学環助教授 山内祐平



なぜ今eラーニングなのか

iii onlineは、部局レベルでは東京大学初のeラーニングサイトである。学際情報学府の特徴のひとつとして、社会人大学院生が多いことが挙げられる。新聞社や通信社、出版社や広告代理店、官公庁などで働いている人たちが集う。彼らは忙しい仕事の傍ら大学院に通うのである。そのため、仕事の都合で講義に出席できないことも少なくない。そのように多忙な社会人大学院生を受け入れるからには、大学院サイトで、彼らの通学、学習の機会をサポートする制度や仕組みを提供することが不可欠となる。

学際情報学府は社会人大学院生の学習機会を確保し、質の高い教育を提供することをその目的のひとつとしてeラーニングサイトiii onlineを導入した。その結果、社会人大学院生からは時間的、体力的拘束からの解放や学習の効率化についての高い評価が得られている。また、iii onlineは、これまで「象牙の塔」と揶揄されることの多かった大学院の持てる「知」を地域・社会へと開放していく新たな試みでもある。

既に海外では、マサチューセッツ工科大学が、OpenCourseWare事業を立ちあげ、大学の知の公開を積極的に展開している。2002年度、iii onlineでは東京大学大学院の4つの講義、辻井潤一教授『自然言語処理論』、原島博教授『コミュニケーションシステム』、濱田純一教授『情報政策論』、水越伸助教授『メディア表現論』をビデオストリーミングで配信した。



iii onlineの展開

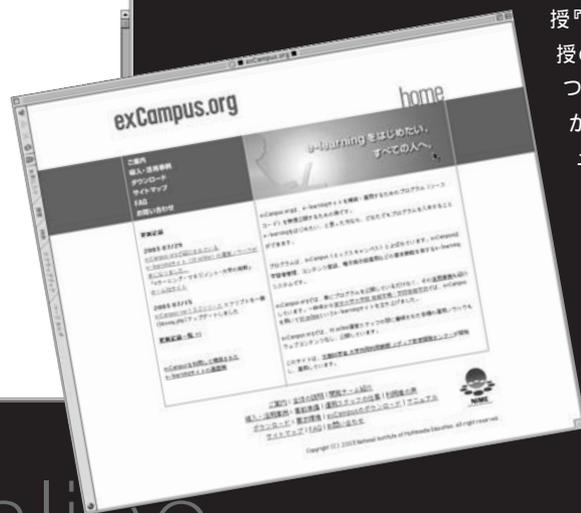
これにより学習者はオンデマンドでこれらの講義を受講できることとなる。1講義90分が15分ずつ、6つのビデオクリップに分割される。このビデオストリーミングは授業履修者ではない東京大学外部の人間でも視聴可能である。(科目履修登録者にものみ専用掲示板や資料が利用可能となっている。)

iii online第3の目的は、学習過程の透明化と可視化のために有用な研究開発を行うことである。iii onlineでは、旧来の不透明であった大学における教育、学習活動の問題点等を、eラーニングの実施を通じて明らかにし、その問題点に対する解決策と大学と学習者の新しい相互作用のありかたを模索することが目指されている。

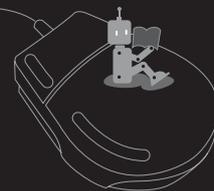
現在、iii onlineプロジェクトの下に、数個のサブプロジェクトが進行している。eラーニングからの離脱を防ぐための研究開発や電子掲示板のモデレーションに関する研究、携帯電話を利用したCSCL(Computer Supported Collaborative Learning)活性化研究(iTree)などが行われており、着々とノウハウの蓄積が進んでいる。また、iii onlineプロジェクトは、メディア教育開発センターと共同研究の形で進んでおり、ここで開発された基盤システムや研究知見は、exCampusという名前でオープンソース化され誰でも事由に利用することができるようになってきている。(http://www.excampus.org)

iii onlineは、2003年2月20日現在で、107万ヒット、5000時間のビデオ配信を行っており、のべ46347人が利用している。このうち93.53%が学外からの利用者である。アクセス記録の解析から配信した各授業に数百人の利用者があったと推定されている。

2003年春より、石田英敬教授『情報記号論』、山内祐平助教授の『情報リテラシー論』の2つの授業を配信中であり、秋からは、荒川忠一教授『シミュレーションシステム』、佐倉統助教授『進化生態情報学』の授業を公開予定である。iii onlineは、http://www.iii.u-tokyo.ac.jpからアクセスすることができる。



iii online
PROJECT
e-learning site • iii online • <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>



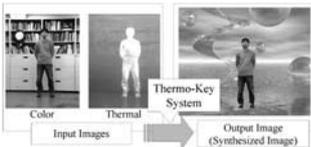
横浜赤レンガ倉庫外壁に、
バイヨン寺院3D映像が・・・

池内研究室(池内克史教授)では、科学技術振興事業団CRESTプロジェクトとして文化遺産のデジタル化を進めている。今年2月にJSA (Japanese Government Team for Safeguarding Angkor) と共同で、カンボジアにあるアンコールトム遺跡・バイヨン寺院の計測を行い、先ごろデジタル3D映像を作成することに成功。この7月、横浜赤レンガ倉庫で開催された「J-ASEAN VISUAL ARTS FESTIVAL」にこの映像を出展し、期間中の夜、倉庫外壁にデジタルバイヨンの3D映像が映しだされた。同研究室では今年の12月に再度カンボジアで計測を行い、より詳細なデータを取得する予定。



苗村健助教授が国際会議で発表した
Thermo-Keyが報道される

苗村助教授が、アメリカサンディエゴで開催されたSIGGRAPH 2003で発表した、Thermo-Key(サーモキー合成)が、ACACIA's ENTERTAINMENT Technology Report Vol.1 No.4、ドイツComputer Trend TVや、インターネット上のTechnology Research News、zdnnet、ASCII24などで紹介された。



NEWS

2003 NUMBER THREE

「学環・学府」は、情報学環の日々の活動を、より多くの方に知っていただくものです。企画室では、研究室の活動報告、イベント予定など、あらゆる情報をお待ちしています!

Thermo-Keyは、場面の温度差によって、映像を切り取り、合成することができるもの。発表の内容は URL : <http://www.hc.t.u-tokyo.ac.jp/project/thermo-key/>

長谷川一氏(水越研D2)、
メディア論研究者として新聞で紹介

2003年7月16日付朝日新聞夕刊に長谷川氏がメディア論研究者として、自著「出版と知のメディア」と共に紹介された。長谷川氏は、「取材を受けるのは初めての経験でした。担当の記者の方が、出版についての造詣が深く、数十枚の付箋がついた拙著を持ってきていて、鋭い質問もありましたが、『取材』というよりむしろ関心を共有するものだろうが、いろいろ話をした感じで、気がつくとも3時間も経っていました。」と、取材の感想を話してくれた。

中村直行氏(須藤研D2)分担執筆の
雑誌発行

中村氏が分担執筆した雑誌『緩和医療学』(Vol.5 no.3 2003年7月先端医学社 P37~43)が発行された。中村氏が執筆したのは「医療情報からみた補完・代替医療」で、日本における補完・代替医療情報を俯瞰し、媒体別にその特徴を見たり医療従事者側・利用者側からのそれぞ



れの視点に見る、認識の乖離の有無を確認したりすることにより、現状における課題と対策をわかりやすく説明している。

表現系プロジェクト研究会報告

月1回、プロジェクト室で研究会を開いている表現系プロジェクト、9月には、ウォータードームプロジェクトで活躍されている杉原有紀氏(アーティスト/東北芸術工科大学デザイン工学部生産デザイン学科専任講師)を「表現系の先輩」として招き、杉原氏が東京大学工学系研究科先端学際工学館研究室博士課程において研究、発表した「没入型水ディスプレイの研究」を博士審査時に使用した資料でプレゼンテーションしていただいた。表現系の学生にとっては、自身の論文作成や、発表の参考になったようだ。



メルプロジェクトからのお知らせ

1. 公開研究会のご案内

10月11日(土)「人間中心的な情報社会を求めて：北欧における情報デザイン戦略」(仮題)報告：カリ・ハンス・コモネン(フィンランド・ヘルシンキ美術デザイン大学メディアラボ)他

11月22日(土)「大学におけるメディアリテラシー教育の課題」司会

: 水越伸助教授(座談会)

12月13日(土)「テレビジョン分析の現在：『知恵の木プロジェクト』の試み(仮題)報告：石田英敬教授他 * 時間/場所: いずれも午後3時~5時30分、情報学環暫定建物2階会議室

2. メルプロジェクトからの報告
フィリピン・サントトマス大学と神田外語大学の学生を結び、映像制作を通じて異文化交流とメディアリテラシーの育成をねらうプロジェクト「dCATCH」が、坂田邦子(社会情報学研究所助手)、中村豊(水越研M1)らを中心に進行中。問い合わせ先：水越伸助教授 shin@iii.u-tokyo.ac.jp 山内祐平助教 yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

プロジェクト室に、新しい仲間

プロジェクト室を利用するようになって、10ヶ月。この9月から、表現系プロジェクト(原島教授)、STARプロジェクト(佐倉助教授)、ゲームプロジェクト(馬場助教授)の3つのプロジェクトが、新たにこの部屋を利用するようになった。現在7つのプロジェクトがこの部屋で活動をしている。

修士課程合格者決まる

9月5日に平成16年度 学際情報学府学際情報学専攻 修士課程合格者の発表があった。掲示板を見ながら、早速、携帯で連絡をとる姿、自分の受験番号をカメラに収める姿、黙って立ち去る姿と悲喜こもごも。筆記試験、口述試験を突破した、学際情報学コース34名、実践情報学コース19名が、来春、学際情報学府の仲間になる。



BOOKS

佐々木正人教授の本、この夏刊行

世界の「部分」にしかふれることのできない身体は、どのようにして世界の「全体」の知覚を獲得するのか? 肌理、縁、遮蔽、入れ子などギブソン「生態光学」についての最近の論考と、視覚表現者との対話。

デューラーの500年前の絵を表紙に使った鈴木一誌氏のブックデザインは一見の価値あり。「レイアウトの法則 アートとアフォーダンス」佐々木正人著/春秋社



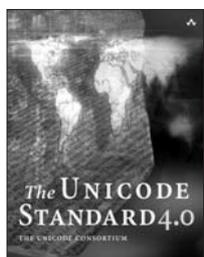
山内祐平助教授著の本刊行

情報化社会における様々なリテラシー概念について整理し、なぜデジタル社会のリテラシーを学ばなければならないのか、「学びのコミュニティ」の中で、意味を感じながら学ぶための方法や、具体的なプロジェクトについて紹介。「デジタル社会のリテラシー『学びのコミュニティ』をデザインする」/山内祐平著/岩波書店



佐倉統助教授、水越伸助教授が関わる出版プロジェクトから本3冊刊行

佐倉統、水越伸らが関わる出版プロジェクト「コミュニティ・パブリッシング」の成果として、今夏この3冊が刊行。いずれもトランスアート社からオンデマンド出版。URL <http://www.transart.co.jp/> 「メル環：メディア表現、学びとリテラシー」/東京大学情報学環メルプロジェクト編 「佐倉統がよむ 進化論のエッセンス」/佐倉統編 「エディフィカーレ・リターンズ」/五十嵐太郎・南泰裕編



原田至郎助教授が参加したプロジェクトの成果

原田助教授が参加してきたプロジェクトの一つの成果として、拡張されたクメール文字コードと、原田助教授が書いた初稿に基づく解説文が収録されている。

The Unicode Standard, Version 4.0 : The Unicode Consortium / Addison-Wesley



編集/発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 企画室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail:news@iii.u-tokyo.ac.jp URL:http://www.iii.u-tokyo.ac.jp